

唐代論書詩にみる書体の「新」と「古」の対極的志向

劍持 翔伍

はじめに

唐代は書が大いに発達した時期である。この時期は政治的・経済的な安定のもと、文化が爛熟し、書はその豊かな文化を象徴した。特にこの時代は、篆・隸・草・行・楷という五書体がいずれも書表現の素材として洗練され、それらを自由に選択して表現することが可能となった時代と言える⁽¹⁾。ゆえに唐代における書家とその遺品は各書体に遍く認められる。

そうした当時の書の多様さを伝えるものとして、書論がある。この書論も唐代におおいに発展し、晩唐には歴代の書論を集成した『法書要録』⁽²⁾が編まれるに至っている。

このような書論集成に収められる資料には、散文とともに韻文の一群が存在する⁽³⁾。従来、これらは「論書詩」と呼ばれ、散文の書論と同様の役割を果たす文献資料の一つと

して位置づけられてきた。論書詩は、文体の違いに依るものか、散文の書論とは異なった側面からの描写を多分に含んでいる点が注目される。しかしながら、現状として、この論書詩に対する検討は十分ではなく、特に散文の書論との関係から論書詩を位置づける試みは、十分に行われていない。

以上より、本稿では唐代に詠じられた論書詩を対象として、当時の書に対してどのような描写が見られるのかについて類別・整理する。また、整理したそれぞれの言説を同時期の散文の書論と比較することで、論書詩が書学史の上で果たした役割についても明確にしたい。

なお、本稿における「論書詩」の定義について補足しておく。歴代の論書詩とされるものにおいては、早くは梁代⁽⁴⁾のものが伝わっており、当時の文房四宝が詩に詠じられている。こうした用具を主題とするものも一定の意義を有す

るが、書論に匹敵するほどの書に関する描写を含むものとは言い難い。蔡頤良は、論書詩に対して定義を行っている。⁽⁵⁾ 本稿でもこれに従い、論書詩を、「書を主題としつつ、特に書跡の美しさや書表現、或いは書家のあり方に対し、何かしらの見解を詠じた詩歌」とすることとし、本稿は、その中でも特に書体を中心に論じたものを主たる対象として論を進めたい。

加えて、本稿で取り上げる論書詩を収集する範囲についても補足しておく。本稿では先行研究を参考として、『墨池編』、『書苑菁華』、『全唐詩』⁽⁸⁾所収の論書詩を考察の対象とした。中でも、『書苑菁華』巻第十七には「書歌」・「書詩」の項目が設けられ、論書詩が体系的にまとめられている。本稿では基本的にこの『書苑菁華』所収の論書詩を中心に、『全唐詩』に収められる詩歌も使用し、考察を行いたい。

以上の定義、収集の範囲に基づき整理を行った結果、唐代の論書詩について以下のような特徴を見出すことができた。まず、上記により収集できた論書詩は全部で九〇首を超え、⁽⁹⁾それらは七二〇年以降に集中している。つまり唐代の論書詩は、これと同時期以降の書法を描写したものが多し。また、論書詩の内容を書体という視点から見ると、

草書、その草書を善くした人物を詠んだ論書詩が、総計（特定の書体を詠まない詩を含めた数）の三割程度と多い。それに次いで、杜甫や韓愈を中心に篆書が総計の一割程度に及び、以上の二書体が論書詩の中心となっている。

一、草書詩

草書を詠んだ論書詩（以下、「草書詩」とする）は、盛唐期に活躍したとされる張旭・懷素（いずれも生卒年不詳）の二人を中心とした、草書を善くした人物を詠んだものが多し。それらに対しては、伝記的な研究、彼らが善くした「狂草」の研究とともに、先行研究が数多く見られる。⁽¹⁰⁾ いずれの草書詩も、その内容は宴会において酒を飲み、揮毫を行った様子とその書法を描写したものである。⁽¹¹⁾

以下、紙幅の都合上、多く残る懷素の狂草を詠じた詩を中心に着目したい。

（一）壁に向かうパフォーマンス

懷素の狂草は、以下の句に明らかかなように、まず形や大きさの特異性の他、その揮毫の奇矯も詠じられる。

起来向壁不停手、起来し壁に向かひて手を停めず、

一行数字大如斗。 一行数字大なること斗の如し。

李白「贈懷素草書歌」

忽然絶叫三五声、 忽然として絶叫すること三五声、

滿壁縦横千万字。 壁に滿ち縦横するは千万字。

寶冀「懷素上人草書歌」

揮毫倏忽千万字、

揮毫し倏忽たるは千万字、

有時一字兩字長丈二。 時有りて一字兩字長さは丈二。

任華「懷素上人草書歌」

まず揮毫された草書の形状については、「丈二」・「斗の如し」など、非常に大字で書かれていたことが強調され、また揮毫の様子については、「手を停めず」など、一気に素早く書かれたことが描写されている。このような大字でかつそれを一気に書き上げる草書法は、草書が持つ尺牘や草稿を書き日常の速写の役割を草書の表現として発展させたものであり、これは従来には見られない新たな草書の使用であると言える。こうした新規性は、当時の人も認めるところであり、

楚僧懷素工草書、

楚の僧懷素は草書に工みなり、

古法尽能新有余。

古法尽く能くし新たなること余り

有り。

戴叔倫「懷素上人草書歌」

このように唐代においてもすでに、上述のような草書の揮毫が、日常の使用のために学ぶ伝統的な「古法」を能くした結果、打ち出された新たな書であることが認識され記録されている。

加えて、このような新しい草書が用いられた場面としては「壁」が多く用いられたよう⁽¹²⁾で、論書詩中にもその語が頻出する。そして、草書詩の多くは宴会の場で詠まれたものが多いこと、さらにその揮毫は酒に酔った末に供された行為であったことを考えると、そのような揮毫は、即興のパフォーマンス的側面を有する身体表現を交えた、余技的な性格を持つものであったことも指摘できよう。

(二) 書論中の言説

それでは、このような草書は書論ではどのように描写されていたのであろうか。寶泉『述書賦』では、張旭の草書揮毫は、酒に酔ったのちの壁に対する興の有る行為であったことを記録する（「張長史則酒酣不羈、逸軌神澄。回眸而壁無全粉、揮筆而氣有興。」）（張旭は酒酣にして不羈、軌

を逸れ神澄めり。眸を回らして壁に全粉無く、筆を揮ひて氣に興有り。）。また、蔡希綜『法書論』でも、興に乗つたのち、壁や屏への草書の揮毫であることを記録する（又乘興之後、方肆其筆、或施於壁、或札於屏、則群象自形、有若飛動」へ又た興に乗りての後、方に其の筆を肆にし、或いは壁に施し、或いは屏に札すれば則ち群象自づから形れ、飛動するが若き有り）。

これらをはじめとして、草書詩と同様に、「興に乗りての後」に「壁」に対しての新たな草書表現を認めて記録する。ところが、書論ではその書法の具体的特徴への記述に欠き、彼らがどのような書を残したのかを十分に伝えない。この背景には、新たな草書揮毫が即興であったことが関係すると解される。即興的な表現は元來後世に残りにくく、彼らの壁書に現存するものは皆無である。つまり書論では、遺品はないが、そうした書法を伝え聞き、記録として残したのである。それに伴い、書論の記述は「興有り」なり「飛動」などの語は見られるが、概して簡潔な言説である印象を与える。

このように草書詩は、伝聞した情報に基づいて体系的に論じることが多い書論の記述に比して、揮毫者により密接な立場・状況からその書作の特徴や揮毫の特性を描写する

ことが可能であり、それは詩の主観的な立場から論じる文体的特性とも相まって、当時の草書揮毫を別視点から伝える。

二、篆書詩

続いて、草書詩に次いで多くが見られた、篆書を詠んだ論書詩（以下、「篆書詩」とする）について着目したい。篆書詩は早くから散文の書論と同様に書を論じた資料としてその一部が注目されているが、広く篆書詩に言及した研究は少ない¹⁴。そこで本節では、多くの篆書詩を対象として、注目すべき言説を書論と対照させつつ、項目ごとに整理してゆきたい。

篆書詩を概観すると、「石鼓文」などの固有の遺品について具体的な内容を伴う篆書詩が中唐期から多く存在している。また、篆書詩ではリアルタイムの制作・表現に関する記録は少なく、過去の具体的な遺品の名称を掲げるなど、古来の記録に基づく記述を行う側面が強い。

ところで、篆書詩がこの頃になって多くが認められるということは、古くから存在している篆書は、これまで詩の題材としてあまり着目されなかったということである¹⁵。つまり、こうした篆書詩が唐代に現れること自体が、当時の

篆書作品と篆書という書体への興味の高まりを示す現象である。

では、簡単に中唐期までの篆書の使用について整理しておこう。篆書は秦代まで正式書体として用いられたが、以降、碑誌の題額・蓋、印章を中心として、装飾性を有する、権威を持つ書体として用いられることが多くなる。唐代の使用も依然としてその流れを汲むが、盛唐期から徐々に使用が多岐に渡り、李陽冰(生卒年不詳)の登場によってそれは一変する。彼の善くした「玉筋篆」と呼ばれる書風が一世を風靡し、以後宋代まで流行することとなる。

(一) 李陽冰による篆書の復活

唐代において、書体史を体系的に整理した功績が特筆されるのが、代表的な書論家張懷瓘(生卒年不詳)である。彼の書論『書断』(七二七)では、十体にもわたる書体の淵源が、過去の文献を踏まえて体系的に整理されている。その中で、小篆については李斯が作った書体であると述べている(「案小篆者、秦始皇丞相李斯所作也。」〈案ずるに小篆なる者は、秦の始皇の丞相李斯の作る所なり。〉)。

李斯を小篆の創始者とするこの認識は、広く当時の共通認識となっていたようで、

秦有李斯漢蔡邕、秦に李斯有り漢は蔡邕、
中間作者絶不聞。 中間の作者絶えて聞かず。

杜甫「李潮八分小篆歌」

杜甫のこの詩でも特に李斯が篆書を創始し、代表的書人であることが認識されている。

これに加えて、篆書詩における重要な要素として、李陽冰の存在が挙げられる。上記の杜甫詩における李潮も李陽冰を指すという指摘があるが、この詩を含め、中唐期に現れた李陽冰を論じた篆書詩は五点存在する。中でも李陽冰の捉え方として典型的なものに、以下の記述が見られる。

玉筋真文久不興、玉筋の真文久しく興らず、

李斯伝到李陽冰。 李斯伝へて李陽冰に到る。

正悲千載無來者、正に千載來たる者無きを悲しむに、
果見僧中有箇僧。 果して僧中に箇の僧有るを見る。

齊己「謝西川果域大師玉筋篆書」

この他、詩ではないが、以下の詞や賦にも同類の描写が認められる。

斯去千年、冰生唐時。 斯 去りて千年、冰 唐時に

生る。

冰復た去れり、後に来る者

は誰ぞ。

後千年有人、誰能待之。 後千年に人有らんも、誰か

能く之を待たん。

舒元興「題李陽冰玉筍篆詞」

通家世業、趙郡李君。

通家の世業、趙郡の李君。

嶧山並驚、宣父同群。 嶧山と並び驚せ、宣父と群を

同じくす。

寶泉『述書賦』

これらを見ると、小篆が千年前に興ったことを踏まえながらも、唐代の世において、李陽冰が李斯以来断絶していた古い書体Ⅱ篆書を復活させたことが称賛され、その功績をたたえる内容となっている。特に「久しく興らず」や「去ること千年」など、時代の隔絶を強調することによって、ますます李陽冰の復興の功績を際立たせている。

それでは、こうして賞賛された李陽冰について、書論ではどのように述べられていたのであろうか。呂総『統書

評』では、李斯の後を継ぐ唯一の書家と目され（「李陽冰書若古釵倚物、力有万夫。李斯之後、一人而已。」）（「李陽冰の書 古釵の倚物にして、力に万夫を有するが若し。李斯の後、一人のみ。」）、舒元興『玉筍篆志』でも、篆書の道を授かった、李斯より千年を隔てて現れた人物として描写される（「天意謂篆之道、不可以終絶、故授之以趙郡李氏子陽冰。（中略）独能隔一千年而与秦斯相見、可謂能不孤天意矣。」）（「天意謂へらく篆の道は、以て終絶すべからず、故に之を授くるに趙郡李氏陽冰を以てすと。（中略）独り能く一千年を隔て、秦の斯と相見え、能く天意に孤かずと謂ふべし。」）。

このように書論においても、当時に李陽冰の篆書は特別視されていたとみられ、『統書評』に唯一の篆書家として取り上げられるのは象徴的な事象である。特に李陽冰が李斯以来、断絶していた篆書を復活させたことに對する称賛は、論書詩と同様である。しかし、当時の書論における李陽冰の篆書法への論及は、上記を除きほとんど見受けられない。すなわち論書詩は、そうした書論における記述の不足を補う存在として、大いに注目されるのである。

(二)「古」の象徴

前述したように、篆書詩が発生したという事実は、篆書への興味の高まりを示している。また一方で、書法に対し、特に取り立てて言及することはないが、篆書の名がみえる論書詩が残されている。これらは書に対する言説を欠くことから、厳密には論書詩の定義から外れるが、考察の補助として数例を取り上げることとする。

乱紙失経偈、乱紙 経偈を失ひ、

断碑分篆蹤、断碑 篆蹤を分かつ。

唐求「古寺」

沙埋古篆折碑文、沙は古篆を埋め碑文を折り、

六国興亡事計君、六国の興亡 事君に計る。

賈島「経蘇秦墓」

樹古雷痕剥、樹古びて雷痕剥れ、

碑荒篆画訛、碑荒れて篆画訛る。

貫休「経先主廟作」

以上の用例では、某所を訪れた際に詠まれた詩において、その場所、その物が古びている、という描写のために「篆」という語が用いられている。その篆は「埋」や

「訛」という時間の経過を伝える語と合わせて使用されており、また同時に直接「古」字を用いるものも多い。いわば古物の象徴として用いられている。このような使用はほかの書体、例えば同様に古書体に区分される「八分」では全く使用されず、篆書固有の使用であると見られる。このように篆書を古の象徴として用いることは、その背景に篆書への関心の高まりや書体史的な理解の深まりが潜むと推測され、当時の篆書に対する認識の一面を伝える資料であると見えよう。

以上のように唐代の篆書詩を通覧するなら、「書断」において体系的な整理がなされた書体史が、当時の詩人達の共通認識となっていたことが示唆された。特にこれらの篆書詩は、李陽冰の評価を補ううえで意義が大きい。これに関連してか、篆書を古の象徴として詩に詠み込むことが多くあったようで、この使用は篆書という書体に特有の現象であった。

三、論書詩にみえる書への視点

この節では、複数の書体の論書詩にわたる、あるいは単独の論書詩に見出すことのできる、書に対する言説を検討し、それらが果たす役割から論書詩の持つ意義を導きたい。

(一) 「筋骨」・「瘦硬」の尊重

「筋骨」の語は書論で伝統的に使用される語で、唐代書論にも頻出する。⁽¹⁷⁾ そうした語が論書詩においても、以下のように用いられている。

師不談經不坐禪、師は經を談せず坐禪せず、
筋骨唯於草書妙。筋骨唯だ草書に於いて妙たり。

積貫休「懷素上人草書歌」

張旭骨、懷素筋、張旭の骨、懷素の筋、
筋骨一時伝斯人。筋骨一時斯の人に伝はる。

史邕「修公上人草書歌」

右記の草書詩は、その書法において「筋骨」を見通している。こうした記述により、従来の草書を発展させた新しい草書法においてもなお、伝統的な「筋骨」という語を用いて評価する姿勢は失われなかったのである。

加えて、「筋骨」に類する用語として、これも伝統的に用いられてきた「瘦」⁽¹⁸⁾の使用も認められる。それは篆書（小篆）と八分を詠んだ詩に以下のように認められる。

嶧山之碑野火焚、嶧山の碑は野火に焚かれ、

棗木伝刻肥失真。棗木の伝刻は肥して真を失ふ。

苦県光和尚骨立、苦県の光和 尚ほ骨立し、

書貴瘦硬方通神。書は瘦硬なるを貴び方て神に通ず。

杜甫「李潮八分小篆歌」

この詩では、「肥」した伝刻を比較対象に挙げ、書法の「瘦硬」たるべきことを説いている。それは、上掲の「筋骨」を貴ぶ姿勢と通じて、伝統的な価値観と一致する。

なお、論書詩のみならず同時期の書論においても、前述のように「筋骨」などの語は頻見され、張懷瓘『評書藥石論』では、馬に例えて筋が多いものを貴ぶとし（「夫馬筋多肉少為上、肉多筋少為下。書亦如之。」）、「夫れ馬は筋多く肉少なきを上と為し、肉多く筋少なきを下と為す。書も亦た之くの如し。」）、徐浩『論書』は、初学の際の筋骨の優先を説いている（「初学之際、宜先筋骨。筋骨不立、肉何所附。」）（初学の際には、宜しく筋骨を先にすべし。筋骨立たずんば、肉何所にか附かん。）など、枚挙にいとまがない。したがって、新たな表現をみせた草書、古い書体である篆書という、当時の日常的な書体ではないものに対しても、当時の論書詩は、伝統的な「筋骨」や「瘦硬」を貴んでい

た。これは同時代の書論との対照からも重要な記述である。

(二) 王羲之の低評価

「書聖」とされた王羲之(三〇三―三六一)は従来格別の評価を受けており、特に唐代においては太宗皇帝の奨励により、それは揺るぎないものとなった。しかし、盛唐期以降になるとそれに反する言説が認められ、韓愈「石鼓歌」のように、基本的に篆書詩でありながら、

羲之俗書趁姿媚、⁽¹⁹⁾ 羲之の俗書は姿媚に趁き、
数紙尚可博白鷺。 数紙もて尚ほ白鷺を博むべし。

と、王羲之の書を否定的に捉える動きが目立ってくる。

また、直接羲之を低評価するわけではないが、以下の用例も注目される。

自言軀腕無所拘、 自ら言ふ軀腕して拘る所無しと、
大笑羲之用陣図。⁽²⁰⁾ 大いに笑ふ羲之の陣図を用ふるを。

魯収「懷素上人草書歌」

ここでは、王羲之の著作とされる、執筆法や基本点画を説

いた書論「筆陣図」⁽²¹⁾を意に介さない様を伝えており、伝統的な王羲之書法からの脱却を示唆する。

こうした傾向の記述は、張懷瓘の書論にも見ることができ、「書議」(七五八)では、羲之の草書の弱さを指摘し、低評価を与える(「逸少草有女郎才無丈夫氣、不足貴也。」)。「逸少の草は女郎の才有りて丈夫の氣無し、貴ぶに足らざるなり。」)。

この言をはじめとして、張の書論では、王の草書評価が次第に下がることが指摘される。⁽²²⁾この言説は当時において独自の指摘であるが、右記の論書詩を見ると、張懷瓘の評価の変化が単なる個人的なものではなく、時代性を帯びた評価の変化である可能性も浮上してくる。

さらに言えば、広く通行し、評価されていた王羲之の伝統的な書法を低く見、「石鼓」を称揚する韓愈詩の内容に鑑みれば、その背景には通俗化したものを排し、「古」なるものを尊重しようとする姿勢を有していたことも容易に想像できる。

(三) 新しい草書への批判的見解

前述のように、張旭・懷素らの新しい草書は、一定の評価を受けていた。しかしながら、それらに反する言説がい

くつかの論書詩に認められる。杜甫「李潮八分小篆歌」には、以下のように張旭の名を挙げて草書を批判的に捉える言説がある。

吳郡張顛誇草書、吳郡の張顛草書を誇り、
草書非古空雄壯。草書は古に非ず空しく雄壯。

新しい草書の勃興を八分・小篆と比較して、「空しく雄壯」という批判的な評価を与える。ここにおいて「草書は古に非ず」という語を勘案すれば、逆説的に「古」なる書体を尊重する態度が示され、新たな草書よりも古を重視する一派の台頭が強く示唆される。

これに加えて、僅か一点のみ見られた楷書の論書詩においても、類似した指摘が見られる。

不同懷素只攻顛、懷素の只だ顛を攻むるに同じから
ず、
豈類張芝惟札草。豈に張芝の惟れ札草なるに類せんや。

賈耽「虞書歌」

新しい草書の代表的人物の懷素の書を「只だ顛を攻むる」と指摘し、虞世南（五五八―六三八）の楷書と比較している。新たな草書に対して、「顛」なる書風のみに行き過ぎた書風を批判的に指摘する人物も存在していたのである。当時流行していた「雄壯」や「顛」を謳う草書よりも、篆書・八分の「古」法や楷書を重視する風潮が存在したことが想像される。

以上の三つの観点から、論書詩には書体の枠を超えて、共通する書への視点を看取することができた。当時の書体認識を読み取ってゆくうえで、こうした論書詩の言説は、書論には表出し難いものを補ううえで、意義が大きい。

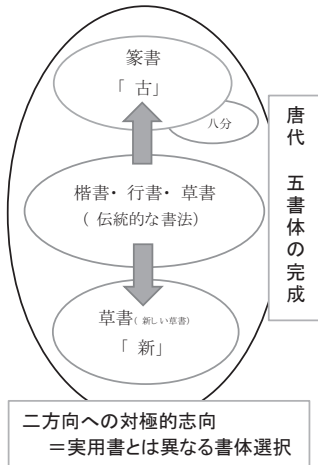
特に、上記の（二）・（三）の観点から、「古」への積極的な視点が見いだされた点は注目される。当時の流行や、伝統的な書法に対抗する形で、古への志向の存在が認められることは書法史的に意義深い。すなわち、王羲之書法を通俗的なものと捉えることや、新しい草書を過剰な表現として難ざる点は、当時、異なる書体観が並存したことを示唆する。

おわりに

ここまで、草書詩・篆書詩について書論との対照から、

その内容とその意義を読み解き、最後に複数の論書詩にみえる書への視点について検討してきた。各節での結論を統括すると、以下のように結論づけられる。

草書詩・篆書詩が盛んに詠じられた背景には、いずれの論書詩においても、今までになかった、或いは断絶していた書に注目する動向の存在が指摘される。換言すれば、草書は今後の展開が期待できる「新しい」書法、篆書は再回顧すべき「古い」書法という、相反する方向への意識であることに気づく。⁽²³⁾ こうした対立は、各論書詩の作者らが、異なる二書体のそれぞれを積極的に評価しつつ、さらに大きな思潮の形成を促しているように察せられる。その関係性を図示すれば、以下のようになる。



【模式図：唐代論書詩にみる書体の対極的志向】

それら双方向への志向は、日常の通行書体として用いられる書体・書風ではなく、それとは目的の異なる表現的な書体の選択であったことに注目せねばならない。王羲之の低評価などの背景を想像すれば、それは当時において、実用的な書法からの脱却、表現的な書法の志向の反映と位置づけられるのではなからうか。始めに論じたように、書論によって名の残る人物とは異なる層、すなわち論書詩を詠じた人物たちにおいても、このような指摘を行っていたことが明らかとなった。論書詩は、当時の書体認識について、多面的に把握することを可能にした点においても、書法史解明に果たす役割は大きい。

論書詩は、書論では省かれやすい一個人の主観的な感動を、書論とは異なる視点から描写し、後世に伝えることができる。書法の妙趣の言語化はとかく困難を伴うが、詩による表現の幅の広さは、そうした難を克服する可能性を秘めている。そうした詩ならではの表現について、更に検討を加えてゆきたい。

草書の「新」と篆書の「古」が対極的な志向であったように、草書詩では李白、篆書詩では杜甫を代表として、論書詩の作者たちが明瞭に区分される点は興味深い。詩人の価値観や、その文学的影響力に対する検討も重要な知見を

提示しよう。これらについては稿を改めたい。

また、草書と篆書への興味という視点、それが表す従来とは異なる書体選択は、他の文献資料・遺品からも跡づけることができる。今後も論書詩を含めた様々な資料を用いて、広い視野から書に考察を深めてゆきたい。

注

- (1) 伏見冲敏は「書体と書風」(『書の歴史 中国篇』二玄社、一九六〇)にて、唐代を「すべて出そろった各体を自由に選択し、そこに自分の領域を切り開くことができた時代」と述べている。
- (2) 唐・張彦遠輯の書論集成。本稿ではテキストとして、中国芸術文献叢刊『法書要録』(浙江人民美術出版社、二〇一二)を使用した。
- (3) 書論集成に所収の書論においても、賦や詞などの韻文の文体を持つものもある。本稿ではこれらを慣例に従い、書論として扱う。
- (4) 例えば梁武帝の「詠筆」(『玉台新詠』所収)など。
- (5) 「唐代論書詩研究」(『書法研究』総第一二四期 上海書画出版社、二〇〇五)。
- (6) 北宋・朱長文輯の書論集成。本稿ではテキストとして、中国芸術文献叢刊『墨池編』(浙江人民美術出版社、二〇一二)を使用した。

(7) 南宋・陳思輯の書論集成。本稿ではテキストとして、崔爾平校注『書苑菁華校注』(上海辭書出版社、二〇一三)を使用した。

(8) 本稿では、初歩的な検索に「全唐詩庫」(鄭州大学網絡管理中心、<http://www3.zzu.edu.cn/qts/>)を使用し、『全唐詩』(中華書局、一九六〇)を参照した。

(9) 前掲注(5)論文末尾に「唐代論書詩存目」を設け、全九三首をおよそ時代順に排列している。私算した結果、ほぼ同様の論書詩を取り扱う。

(10) 例えば、方愛龍「草書歌詩与懷素草書」(『杭州師範学院学报』一九九二年第四期)など。

(11) 中田勇次郎は「懷素の書とその影響」(『書道全集』第十卷平凡社、一九六六)、「懷素上人草書歌」の同題を持つ五首の詩を、ほぼ同時に詠まれたと指摘する。

(12) 「壁書」、「題壁の詩」については、杉村邦彦「壁書考」(『滋賀大國文』第十八号、一九八〇)、鈴木修次「題壁の詩」(『NHKブックス267 唐詩 その伝達の場』日本放送出版協会、一九七六)を参照。唐代、晩唐にかけて壁への即興的な揮毫・題詩が盛んにおこなわれたようで、その一端として、揮毫の動きを含めた新たな草書による表現的な書法が盛んに行われたと推測される。

(13) 北宋・趙明誠『金石錄』巻上は、すでに「杜甫李潮小篆八分歌有曰(以下略、原文ママ)」と、杜甫の詩を引用する。

(14) 例えば、甘中流『中国書法批評史』(人民美術出版社、二〇

一六) 所収、「唐朝中期詩人的書法理想」、「韓愈對書法中情感與物象表現的重視」など。

(15) 「詩詞名句網」(<http://www.shicimingju.com>)を用いて「篆」字の使用を調査した結果、用例は唐代より急激に増加している。

(16) 李潮と李陽冰については、福本雅一「李潮あるいは李陽冰」(『零箋集』二玄社、一九八六)が詳しい。

(17) 書論における「骨」の語については、河内利治『書法審美範疇語(骨)義考』(『書法美学の研究』汲古書院、二〇〇四)に詳しい。

(18) 「瘦」は、「肥」の対語であり、「骨」に通ずる書の強さを表す語として用いられる。

(19) 「俗」字の解釈については、「通俗流行的書体」(『漢語大詞典』)、「風雅でない筆蹟」(『大漢和辞典』)と見解が分かれる。本稿では当時に広く使用された通俗的な書、として取りたい。

(20) 「用陣図」については、前掲注(11)論文で「筆陣図」と解釈されており、それに従う。

(21) 「筆陣図」については、成田健太郎「初唐以前の書訣について」(『書論』第三八号、二〇一一)が詳しい。

(22) 「書断」で高く評価されていた王羲之の草書は、『書估』(七五四)、『書議』と後年の書論では評価が低下することが指摘される。

(23) なお、「古」と「今(新)」の対比概念については、唐代の孫過庭『書譜』(六八七)に「今の古に速ばざるは、古は質に

して今は妍なればなり」と見えるように、書論において用いられる伝統的な概念である。本稿では、その「古」と「新」の概念の範疇にありながらも、論書詩の篆書と草書において、対極的な概念が存在することを意図する。

(筑波大学大学院)